



〈性暴力被害にあうこと〉をめぐる「他者」を媒介  
とした語りの分析：  
「性暴力被害者」アイデンティティズ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 良子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/00017684">http://hdl.handle.net/10466/00017684</a>

性暴力——その後を生き抜く人たちと共に  
第1回 講演1

# 〈性暴力被害にあうこと〉をめぐる 「他者」を媒介とした語りの分析 ——「性暴力被害者」アイデンティティズ——

伊藤 良子

## 1. 性暴力の定義

性暴力という言葉は、1960年代後半から70年代前半にかけて興った女性解放運動（ウーマン・リブ）の時代にアメリカでつくられたフェミニズムの対抗言語であり、日本でも1980年代末から女性運動のなかで使われはじめた（井上ほか編 2002:289）。また、今では魂の殺人ともいわれることで、その惨忍さに焦点づけられている強かんも、かつては「いたずら」「乱暴」「（婦女）暴行」と呼ばれて矮小化され、些末な問題として扱われてきた。女性たちはこうした男性中心主義的な現状に対抗するため、それらを「性暴力」という新しい概念を用いて表現し、男性から女性に向けられた性的権利、性的自由を侵害する行為として再定義し、革新的なパラダイムの転換を図った。

現在、国際社会や国の政策において性暴力は、フェミニズムの思想を継承して「女性に対する暴力」、あるいは「女性差別」の問題として位置づけられている。実際、男性よりも女性の方が被害を受ける割合ははるかに高いものの、その標的となっているのは女性だけではない。男性、セクシュアルマイノリティ、子ども、高齢者、障がい者、被差別者など、あらゆる

社会的カテゴリーに属している人たちも同様に被害を受けている。それは、性暴力が、加害者の性欲や性衝動に起因して発生しているわけではなく、加害者が自身の力（power）を感じたいと思ったときに「女性的な位置にいる、ヘゲモニックな男性ではない、脆弱である、自分よりも立場が低い、支配してもよい」とみなした人のセクシュアリティを攻撃することで生じているからだ。つまり、性暴力は性的問題ではなく、セクシュアリティを媒介とした人権侵害の問題なのである。性暴力は世界中で起こっており、問題に向き合う際の立場、加害者と被害者との関係性、行為の内容などによって、性的搾取、性犯罪、セクシュアル・ハラスメント、性虐待など、異なる用語を当てはめられてきた。いつ、だれが、どこで、なにを、どのように行ったのかといった文脈によって呼び方が異なるが、セクシュアリティを媒介とした人権侵害の問題としての本質は同じである（図1）。

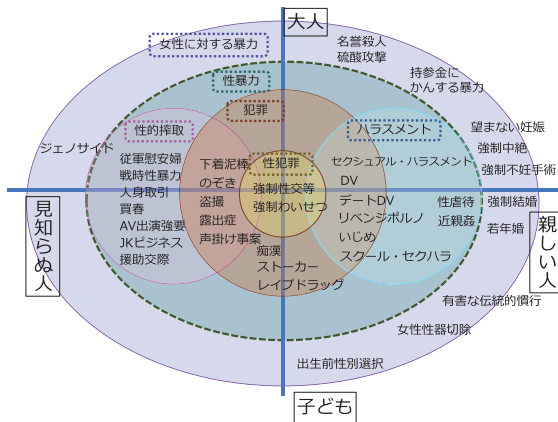


図1 性暴力の問題

近年、「すべての性的な行為の前に、その行為をしたいか否かの意志を互いに確認するべきだ」とする性的同意（sexual consent）の概念と、「積極的な同意がない状態でなされた性的な行為はすべて性暴力である」という考え方が国際社会で常識となりつつある。言い換えれば、性的自己決定権（sexual autonomy）を行使することができず、心身の境界線（boundary）

や身体の尊厳 (bodily integrity) を侵害されたと感じる体験はすべて性暴力にあたる。しかし、日本では、いまだ性暴力の定義が定着しておらず、政府機関や研究者、専門家、支援者、当事者、世間の人びとの間で十分なコンセンサスが得られていない。

## 2. 問題の所在と本稿の分析枠組み

### 2-1. 「もうひとつの物語」に描かれた「性暴力被害者」像

1980年代の性暴力のパラダイムの転換以降、男性中心主義的な「支配的な物語 (dominant story)」は、人権侵害としての性暴力という「もうひとつの物語 (alternative story)」<sup>1</sup>に書き換えられた。現在流布している言説の多くがこの「もうひとつの物語」に当たる。物語は主に、草の根のフェミニズムの活動のなかで寄せられた女性たちの「声」と、その「声」を支援者や専門家が代弁する形で紡いだ「集合の知」で構成されている。多岐にわたる分野の理論や概念<sup>2</sup>を援用しつつ、男女間のジェンダー不均衡な権力関係と、被害者の心の傷を中心に据えた物語が紡がれてきた。たとえば、「もうひとつの物語」において支援者や専門家は〈性暴力被害にあうこと〉をしばしば次のような現象として説明している。

性暴力の被害は、身体の傷害や、望まない妊娠、性感染症など、身体的な影響だけではありません。「自分の体は自分のもの」という、人が生きていくうえでもっとも基本的な安全の感覚を損ない、心に深い傷を残すこととなります。強かんの被害者がPTSDを発症する率は、傷害事件や交通事故、災害の被災者と比べると非常に高く、心身の健

---

<sup>1</sup> 「支配的な物語」と「もうひとつの物語」は、マイケル・ホワイトとデビッド・エプストン (White and Epston 1990=2017) が、家族療法の領域でナラティブ・セラピーにおいて提唱した概念である。

<sup>2</sup> たとえば、1960年代に欧米で展開された犯罪被害者の権利擁護運動、1970年代に世界中で展開された第二波フェミニズム運動や各種マイノリティの社会運動、国連による女性や子どもの人権擁護活動、フェミニズムや社会学、精神医学、心理学、被害者学などの各種アカデミズムなどの理論や概念など。

康と社会的経済的な生活の質に、生涯にわたって重大な影響を及ぼすこともあります。強かんが「魂の殺人」とも呼ばれるゆえんです（性暴力禁止法をつくろうネットワーク<sup>3</sup> 2014: 1-A）。

こうした「もうひとつの物語」の登場によって、これまで周縁化され、沈黙を強いられてきた被害者たちの「声」がようやく世間に知れわたることとなった。その結果、性暴力に対する人びとの意識が変わり、政策や法律、支援制度などが飛躍的に進展したことは紛れもない事実である。物語にはそうしたプラスの側面がある一方で、いったんできあがると事態を理解する際に参照されたり、引用されたりして、人びとの現実の見え方を一定の方向へ導き、制約するという現実制約作用をもっている。つまり、いかなる物語も社会的に支配的なストーリーとして読み込まれるや否や、その物語は個々の人びとにとって抑圧的に働く可能性を孕んでいるということだ。

実際、すべての被害者が「もうひとつの物語」をわたしの物語として受け入れているわけではないだろう。なかには自らの被害経験を捉える際に、「もうひとつの物語」がならうべき物語として機能し、新たな「支配的な物語」として重くのしかかって生きづらく感じている人たちも少なからずいるはずだ。こうした問題関心から、伊藤（2013）は、性暴力被害者を支援している女性団体が発行したミニコミ誌の言説を分析し、「集合の知」として紡がれた「もうひとつの物語」が孕んでいる問題を指摘している。以下では、伊藤の論稿に沿って、草の根の女性たちがミニコミ誌の言説活動をとおして性暴力を社会問題化する際に、「性暴力被害者」をどのように表象してきたか、またそうした表象がどのような課題を内包しているかをみておこう。

かつて女性は男性に従属する「性的客体」に位置づけられていた。1980年代の性暴力のパラダイム転換以降、男性のみならず女性も性的自己決定

---

<sup>3</sup> 「性暴力禁止法をつくろうネットワーク」は、性暴力にかかわる包括的な法制度の整備を求めて、2008年5月に結成された。被害当事者、支援者、法律家、研究者などが参加する全国ネットワークである（性暴力禁止法をつくろうネットワーク 2014）。

権をもっていることが主張され、性的主体としての被害者像が登場した。一方で、「性暴力は人権侵害である」という視座からクレーム申し立てが行われたことで、期せずして男性から人権を侵害されている女性という被害者像が立ち上がり、自己撞着に陥ってしまった。そして1990年代以降、性暴力の問題として捉える事象が、子どもへの性的虐待、セクハラ、DV、ポルノグラフィ、痴漢、従軍慰安婦問題などに拡大されるとともに、性暴力が広範囲で長期におよぶ深刻な影響（トラウマ、PTSD、強かんによる心的外傷後ストレス障害：RTSなど）をもたらすことが強調された。こうした言説活動をとおして、「女性たちは、いつでも、どこでも性暴力を受ける可能性があり、かつ被害を受けた際には長期的に深い心の傷を抱える」といった脆弱な被害者像が描写された。さらに2000年代には、「泣き寝入りをせず、加害者を罰し、第二の被害者を増やさないために社会正義を貫くことができる」闘う被害者像が立ち上げられた。ところが、闘う被害者像が目指されることに対して、当事者の立場から「支援者があるべき被害者像をつくりだしている」として異議申し立てが行われた。その後登場したのが、「被害を受け、回復し、乗り越えた」物語を語る事ができるサバイバーとしての被害者像であった（伊藤 2013）。以上みてきたように、ミニコミ誌に描かれていたのは、脆弱な被害者、あるいは社会正義と闘ったり、被害を乗り越えた強いサバイバーといったステレオタイプな「性暴力被害者」像であった。一人ひとりの被害者にとって、個人的な体験であった〈性暴力被害にあうこと〉をめぐる物語は、「集合の知」として描かれた時点で単なるストーリーやシンボリックな物語ではなくなり、政治的な場となってある一定の方向性を目指した特定の「性暴力被害者」像をつくりだす機能を果たしていることを確認した。

加えて課題を指摘するならば、精神医学や心理学の分野から示された「性暴力が病理的で深刻な影響をもたらす」という臨床的、学問的な知見の多くは、個々の被害者たちが呈した生物学的反応をまとめて提示したものであり、すべての被害者がそれらの症状を発症するわけではない。さらに、それらの言説活動で専門家たちが目指していることは、そうした症状を呈した被害者に対してどのようにサポートを提供するかということと同じ専

門家に向かって提言することである。一方、女性運動の立場から、精神医学や心理学の知見を援用して性暴力が致命的で、克服困難な問題をもたらすことを強調することは、性暴力が蔓延している社会を変革するための戦略であったはずだ。しかしながら、これらの2つの異なる分野の言説が、世間の人びとのみならず、支援者や専門家たちの間でさえも混同して認識されている結果、ステレオタイプな「性暴力被害者」像が蔓延することにつながっている。ステレオタイプな「性暴力被害者」像の蔓延は、個々の被害者にとってスティグマとして働き、当事者が自らの被害経験を多様に解釈したり、「性暴力被害者」アイデンティティを受容したり、否定したり、放棄したりする可能性を阻害するといった問題を孕んでいる。

## 2-2. 自己物語の理論的背景

次に、本稿において〈性暴力被害にあうこと〉をめぐる語りを分析する枠組として「自己への物語論的アプローチ」と「ライフストーリーの樹モデル」を提示する。まず、「自己への物語論的アプローチ」からみていこう。「わたし」とはどのような存在かを認識するにあたり、人は「他者」というものさしを用いて自己を対象化し、社会のなかに位置づける。そして、自分が何者であるかを模索し、自らについて語る行為をとおして、新たな「わたし」をうみだしていく。そうして作られた「わたし」は、一貫したのではなく、さまざまな場面で出会う他者との関係のなかで変化し、多元的、複数的、流動的な側面を持っている（井上ほか 2005；船津 2011）。

「自己への物語論的アプローチ」を提唱している浅野は、「自己物語」がもつ3つの特徴を次のように説明している。1つ目に、物語はその結末が今ここで物語を語っている自分に納得がいく形になるかどうかを基準にして、無数の出来事のなかから意味ある出来事が選択され、相互に関連づけて配置される。この関連づけられた全体がひとつの意味的なまとまりとなり、個々の出来事に意味や方向性を与えることになる。2つ目は、物語にはそのできごとを知っている「語り手」の視点と、実際にそのできごとを体験した「登場人物（主人公が「わたし」の場合も含む）」の視点があり、それら2つは別の視点であるものの、最終的には重なりあわなければなら

ない。そして、3つ目は、物語はいつでも他者に向けて語られ、他者からの承認や批判によって変えられていくものである。物語は人の頭のなかにあるというより、人と人との間に、つまりコミュニケーションのなかにあるものである（浅野 2001）。

次に、やまだ（2020）が提唱した「ライフストーリーの樹モデル」をみていこう。やまだは、ナラティブ研究における「対話的场所（トポス）モデル」の生成を試みており、そのうちのひとつとして「ライフストーリーの樹モデル」を紹介している。場所とは、時空間を統合する心理学的構成概念であり、わたしたち自身や物事がそこにある場、そこでできごとが起こる場のことである。やまだによると、人は、幾重もの社会・文化・歴史的な文脈をもつ多重の場所<sup>トポス</sup>に埋め込まれており、パーソナルなライフストーリーであっても、より大きな文化・社会・歴史的ストーリーと連動しているという。これら多重の場所<sup>トポス</sup>は、空間的広がりとしての社会・文化ネットワークで結ばれているが、パーソナル、ミクロ、メゾ、マクロ<sup>4</sup>いずれの層も、時間的深さとしての歴史的ネットワークによって形成されているという。

本稿では、「自己への物語論的アプローチ」および「ライフストーリーの樹モデル」の視座から、性暴力被害を受けた経験がありながら、支援者となった人たちの〈性暴力被害にあうこと〉の語りを探求する。その際、語り手としての「わたし」と登場人物としての「わたし」が、さまざまな「他者」との関係を媒介としたエピソードに着目する。対象者たちが「他者」との相互行為を契機とした語りをとおして、〈性暴力被害にあうこと〉をどのように意味づけ、どのような方向性を与えようとしているのかを考察する。その際、自己は一貫したものではなく、多元的で複数的な側面をもっているという点に留意し、個々の対象者たちが多元的で、複数的な「わたし」を立ち上げながら、自己のアイデンティティを提示する語りの実践をみていく。管見するかぎり、こうした視座から〈性暴力被害にあうこと〉をめぐる語りを分析した先行研究は見当たらない。

---

<sup>4</sup> やまだは、Bronfenbrenner (1981) の「生態学的モデル」を参照している。



### 3. 研究方法

#### 3-1. 対象者と語りの特徴

対象者は、子どものとき（18歳未満）からインタビュー当時に至るまでに何らかの性暴力被害を受けた経験がある人で、現在は性暴力被害者支援や予防・啓発活動に携わっている支援者である。当事者であり支援者でもある人は、世間一般の「性暴力被害者」よりも性暴力にかんする知識が豊富で、意識的にせよ無意識的にせよ既存の性暴力の認識枠組を再構築したり、脱構築したりするための言語行為を行う可能性が高いと考え、協力を依頼した。

2009年9月から2010年6月に15人の対象者に対して一人につき概ね1時間から3時間の半構造化インタビューを行った。質問項目は、(1)子どものときから現在に至るまでの性暴力被害経験、(2)被害による影響、(3)被害による影響から回復したきっかけ、の3つである。

なお今回の語りは、対象者と筆者がともに性暴力の問題に関心を寄せて、支援活動に携わっていることを互いに承知している関係性のもと、対象者が筆者に語ってもよいと判断した範囲において語られたものである。こうした条件を特筆するのは、とりわけ性暴力の問題はデリケートであり、その経験を誰に話すのか、どこで話すのか、いつの経験をどのタイミングで話すのか、どの程度詳細に語るのか、どのような問題意識から語るのかといった諸条件によって、語りの内容が大きく変わる可能性が高いためである。

15人の対象者による〈性暴力被害にあうこと〉をめぐる語りのうち、本稿の問題関心に照らして特徴的な語りが見いだせた6人のデータを用いる。6人の対象者（Aさん、Bさん、Cさん、Dさん、Eさん、Fさん）を表に示す（表1）。

#### 3-2. 分析の視点

6人のデータのうち「他者」を媒介とした語りに着目し、〈性暴力被害にあうこと〉をめぐる「意味が構成された分岐点」を探究する。ここで「意

表1 対象者

	性別	年代	職業	支援年数	調査日	調査時間	調査場所
Aさん	女性	40歳代	助産師	23年	2009/9	2時間40分	駅ビル階段
Bさん	女性	50歳代	活動家	20年	2009/11	1時間32分	カウンセリングルーム
Cさん	男性	30歳代	活動家	9年	2009/10	2時間36分	大学教室
Dさん	女性	30歳代	活動家	3年	2010/4	3時間00分	会議室
Eさん	女性	50歳代	活動家	12年	2010/6	2時間26分	活動施設
Fさん	女性	40歳代	カウンセラー、活動家	14年	2009/11	2時間09分	ホテル喫茶店

味が構成された分岐点」と表現しているのは、物語の語り手としての「わたし」と登場人物としての「わたし」が、さまざまな「他者」とのエピソードを契機として、かつて〈性暴力被害にあうこと〉に付与していた意味を相対化したり、それまでとは異なる意味を創造したり、修正したりしている語りのことである。そうした語りをとおして、対象者が過去の「わたし」と現在の「わたし」のアイデンティティをどのように立ち上げているのかに着目する。それというのも、語りのなかにある意味づけの変容や、アイデンティティの提示に着目することは、〈性暴力被害にあうこと〉をめぐる新しい物語の可能性を見いだす作業に他ならないからだ。

なお、対象者の語りのデータについては、以下のように記載する。

1. 語りを短く引用する場合は、本文中に「 」で記載する。
2. 語りを長めに引用する場合は、引用部分の前後を一行ずつあけてゴシック体で記載する。
3. (1) 登場人物としての「わたし」の立場からの語りには一重下線を引き、(2) 語り手としての「わたし」の立場からの語りには二重下線      を引く。その他、(3) 筆者が注目した語りには波線の下線~~~~を引く。
4. 筆者が、対象者の語りの内容を補う場合は、( ) 内に追記する。

#### 4. 〈性暴力被害にあうこと〉をめぐる「他者」を媒介とした語り

以下では、対象者が性暴力被害経験と「他者」を媒介としたエピソードをどのように有機的に結びつけているか、またそうした語りをとおして〈性

暴力被害にあうこと〉をどのようなものとして意味づけ、どのようなアイデンティティを提示しているのかという語りの実践をみていく。その際、「ライフストーリーの樹モデル」を援用しつつ、登場人物としての「わたし」と物語の語り手としての「わたし」、すなわち、性暴力被害者としての「わたし」と支援者としての「わたし」が、それぞれどのような場所<sup>トポス</sup>から、どのような立ち位置で、どのような枠組みから話をしているのかに着目し、被害経験の意味を修正したり、再構成したりする意義を検討する。

#### 4-1. 〈性暴力被害にあうこと〉の背景

##### (1) Aさん、女性、40歳代、助産師

Aさんは、幼少期から現在に至るまで、性暴力やDVなどの暴力被害を「毎日のように」繰り返し受け続けてきたそうだ。当時、慢性的に性暴力被害を受けることを「いやらしい身体なので、しかたのないことだ」と捉えていたという。それというのも、幼少時から母と祖母に「早熟」で「男を誘うような因果な身体」だと日常的にいわれてきたからだ。Aさんは、そのメッセージを内面化しており、被害経験を語る際は常に母親と祖母から浴びせられた言葉ともに語られた。

因果って言葉がわかったかどうかって、今あまり覚えてないんだけど、要するにこんな男を誘うような身体、それはね、普段からいわれてたんですよ。「早くからおっぱい大きくなっちゃって」とか、「こんなに小さいうちから生理始まっちゃって」とか、「この子は早熟だよ」とか、「気をつけないと、ロクなもんにならないよ」とか、「男に狙われるよ」とか、「危ないよ」っていうような話を母と祖母がしてるのをよく耳にしていたんです。「やっぱりこの子は因果な身体だよね」って「こんなおっぱいだから、男が近寄ってくるんだよ」みたいなことをそのとき祖母がいった。(中略) 毎日のようにそういったこと(痴漢、露出狂、卑猥なことをいわれるなど)が起こって。でもそのたんに、これはわたしの身体が因果だから、男を誘うようないやらしい身体なので仕方がないことなんだ、と毎日思いました。

Aさんは、「自分の身体を認められず、性に対してポジティブになれなかった」。ところが、たとえ男性が「体目当て」や「セックスする目的で近づいて」きたとしても、「やっとこれで本当の愛にめぐりあえた」と受け止め、「簡単にセックスしていた」時期が続いた。その理由について、「求められると断れない質で、求められているんだったらわたしの必要性っていうのは認めてもらえるんじゃないかっていうのが、根底にあるものだから」という。そうした状況で交際した男性たちは、しばらくすると相次いでDV加害者に豹変した。Aさんは、幼いころから母親や祖母から「愛しているから殴るんだ」といわれながら暴力を振るわれていたため、当時、DVを受けていてもそれが暴力であるとは認識しておらず、「母もそうだったので、やっぱり愛していると人は暴力を振るうんだ」と思っていたという。

(恋人からのDVに対して) わたしがいけないんだ、もっと気をつけなきゃいけないんだみたいな、一事が万事そういう思考でしたね。何でそんなふう思ったかっていうと、わたし母によく殴られてたんです。24～25歳まで殴られてました。よくわたしがいうことをきかないと、「一緒に死のう」とかいて包丁持ち出したりとか、火のついてるストーブを押し倒すとか、そういうことをする人だったので。わたし親ってみんなそういうことするもんだと思っていたんですよ。で、「愛してるからお前のごと殴るんだ」って言って殴るわけです。(中略) わたしのなかで暴力ってそんなにね、嫌悪感がないものだったんです。愛と暴力ってわたしのなかでは一個のセットになってたんで、より強く愛されてることの証のような気がして。暴力もある意味コミュニケーションでしょう？めっちゃめっちゃマイナスなんだけど、スキンシップじゃないですか。だから無視されるよりも殴られてる方がまだいいみたいな。

その後も「暴力がらみの人」や「体目当ての人たちが何人か近づいてきて「半ばやけで付き合ったり」を繰り返したが、やがて「不本意なセックスはしたくない」と初めて伝えることができた男性と知り合い、結婚し

た。しかし、結婚してすぐにセックスレスになり、「君はベジタブルなので、君とのセックスはつまらない」と言われ2年で離婚に至った。ところが、離婚から2年が経過したころ、再び「おっばい目当て」の既婚男性から性的関係を熱望され、「1回くらい人助けのためにしてさしあげましょうかと思って」性的関係をもったところ、身体の「相性がよく」、そのパートナーが10年にわたって「ほめちぎってくれた」ので、今では性や身体に対するイメージが肯定的に変わったという。

その人のおかげで大分、ちっちゃいときから思っていた、自分は汚い  
であるとか、自分の身体はいやらしいであるとか、性被害を受けるのは  
自分のせいだというような思いは減ったかな。だから、一方で性教育の勉強をしたからというものもあるけど、その彼がすごくほめてくれた。ひたすらほめてくれた。「君はとってもすごいよ。君はとっても魅力的なんだよ」ってことを。「(元夫から) 野菜っていわれたんだよ」っていう話をすると「野菜じゃないよ。それは、君のもってる素晴らしさを引き出せなかった彼の問題だったただだよ。だから、君は何も悪くない」ということを再三いう。(中略) 彼が一生懸命とにかくほめちぎってくれた。  
今思えば、あまりほめられたことがなかったの。母にも100点とってもほめられたことがない。よくある話なんですけども、「もっとお前はがんばれる」といわれ続けたから。今の彼は「別にがんばらなくていい」と。

さらに、Aさんの話は子猫とのエピソードに及んだ。Aさん自身が暴力的な家庭で育ったことで母になる勇気をもてず、また出産を経験していないことで助産師としての劣等感を抱えながら生きてきた。ある日、近所でカラスに狙われていた2匹の子猫を保護して育てたことで、「わたしもお母さんでできるかもしれない」と思い直し、自信がついたという。Aさんは、かつて「一人になることが不安」だったり、未来に希望がもてないことで「オーバードーズ」を繰り返していた時期があった。しかし、今は猫の飼育、褒めちぎってくれる恋人の存在、そして性教育の活動など「捨てたくない

ものがたくさんある」から、それらが自傷行為の「ストッパー」になっているという。

やっと初めて自分のなかで、もしかしたらお母さんできるかもしれないんだな、わたしはそれくらいのことのできたかもしれないんだなという自信が、猫を育てた結果ちょっとだけ生まれたんですね。「猫とわたしと自己肯定感」とか言ってるんですけど。そのにゃんこたちを育ててみたことで、すごくわたしのなかで少し自信がアップしたというか。だから、性教育の勉強をした、彼が褒めちぎってくれた10年間、そして猫を育てたことの3つが今のわたしが、10年前、20年前のわたしに比べて回復している原因なのかなと。完全回復かどうかはわかりませんが。

以上みてきたように、Aさんの物語は「〈性暴力被害にあうこと〉の背景」を主要なテーマに掲げ、2つのプロット（筋書き）から構成されていた。1つは被害者の「わたし」の場所からみた語りで、もう1つは支援者の「わたし」の場所からみた語りである。被害者の「わたし」の物語を「ライフストーリーの樹モデル」に照らしてみると、ミクロ・トポスには母と祖母が位置しており、Aさんが内面化していた「いやらしい身体であれば、男性から性的関心を持たれても仕方がない」「因果な身体だから被害を受ける」といった価値観は、母と祖母が抱いていた性規範そのものであることが語られていた。母と祖母の性規範もまた独立して形成されたものではなく、メゾ・トポス、マクロ・トポスにあたる社会の価値観を内面化したものであったはずだ。というのも、Aさんが幼少期から思春期を過ごした1980年代以前の社会において、「男性は女性に欲情して当然」「性行為において男性は能動的に振る舞う役割」を担っている（柳原 2001）といった男性中心主義的な性規範が当然のこととして認識されていたからだ。

一方で、支援者の「わたし」の場所からは、猫の飼育、身体イメージの好転、性教育の活動などのエピソードが語られていた。つまり、支援者の「わたし」にとって、子猫、ほめちぎってくれる恋人、性教育がミクロ・トポスに位

置しており、彼らとの関係性を契機として〈性暴力被害にあうこと〉をめぐる意味が書き換えられていた。書き換えられた物語は、具体的には、「わたし」が頻回に性暴力やDVの被害にあっていたのは、「いやらしい身体」だからではない。むしろ虐待経験の帰結として、愛と暴力を混同し、暴力を容認してしまったからに他ならない。過去の「わたし」は虐待の世代間連鎖を恐れていたが、虐待することなく（子猫の）母になることもできた。また、自分の存在を受容してくれる人に巡り合えたり、性教育で性や身体に対する正しい知識をもつことができれば、自己受容が促進され、被害にあいにくくなった、といったプロットである。

こうした2つのプロットからは、男性中心主義的な性規範や社会・文化的な偏見によって、〈性暴力被害にあうこと〉の意味づけや、自己イメージが歪められていることに気づくことができれば、その筋書き（プロット）を「もうひとつの物語」に書き換えて、自己受容の行動につながられる可能性があることを見いだせた。

## （2）Bさん、女性、50歳代、活動家

次に紹介するのはBさんの語りである。Bさんは、母から直接聞いたわけではないが、Bさんの母も性暴力被害を経験しているのではないかと推察している。というのも、幼いころから、母から「女は夜遅くまで遊んでいたら」いけないといって被害にあわないように注意を促され、また被害にあった際には「女にも隙がある」から被害にあうんだ、ということをいわれ続けてきたからだ。女に生まれたからには常に性暴力被害にあうことを想定し、自分の身は自分で守らなければならないという母からの教えは、現在のBさんの臆病な性格形成につながっているという。

わたしの母もたぶん、その、そういう経験をいっぱいもっていた人だと思んです。だからものすごく性暴力にかかわる行為って、彼女はすごく敏感で。もうだから、女は外に行っちゃいけないとか、夜遅くまで遊んでいたらね、早く帰ってきなさい。痴漢にあったらこわいとか。そうやって、やっぱりそれをまあ、女にも隙があるからだってね。だから、

遅くまで遊んでいるからそういう目にあうみたいな、そういう、まあ、  
ことをまだ彼女は言っていて、だからそういうふうに、そういう目にあ  
わないように、今、あの一、たとえばものすごく一生懸命、駅からちょっ  
と遠かったところに住んでたものですから、いつも車で迎えに来てく  
れるとか、そういうの一生懸命やってくれた。だから、その両方でこ  
れは大変なことだになっていうことはあります。認識が形成されていった  
というか。(中略) やっぱりすごく臆病になってしまった。あと長い間、  
長い間っていうか、28歳くらいまで、外国に行けなかった。ものすごく、  
そういう新しいことをするのもハードルが高い。心理的なハードルが高  
いですね。今もそうだけど。

Bさんは、幼い頃から何度も性暴力を受けてきたことで、「女であることをずっと考え続け」ているそうだ。大学で美術を教えるという仕事を選んだのも、「性的なニュアンスを避け」てジェンダーに縛られない環境で働きたかったからだという。

(性暴力被害による影響について) 生きている間に色んなことがあつて、58歳のわたしが形成されてきてるから、そのことだけとは言わないんだけど、その一、女であることをずっと考え続けるということ、大きいんじゃないかな。えーと、この社会で女であること。(中略) まあ、やっぱりそれはこう、逆に自分から見た世界の謎解きの1つだから。謎の解き方でね。まあ、わたしはこういうアプローチしかなかったのかと思います。だから、もっとその一、性に関係のないことで。ああ、そうね、だから美術(を仕事として)やろうと思って。その中では、性的なニュアンスを避けたかったんですよね。そういう作り方をしていたんだけど、なんか、結局は、性的ってその場合は、ジェンダーなんですけど、なんかそういうアプローチをした方が自分にとってすごく何というかな、手ごたえがあったと。

〈性暴力被害にあうこと〉を意味づけるにあたり、世間の性規範を色濃



く反映した、母の価値観を内面化していたという点で、BさんとAさんの語りは類似していた。しかし、「わたし」が被害を受けた背景として、Aさんは「女性的な身体であること」に焦点を当てていたのに対し、Bさんは「女であること、女として生きること」を主眼に置いていたという点で異なっている。すなわち、Bさんの語りからは、〈性暴力被害にあうこと〉は、自分自身が生きる場所としての身体のみならず、女性として生きていく場所としての社会の安全感をも脅かす体験であることが読み取れた。言い換えるならば、ジェンダー不平等な社会において、〈性暴力被害にあうこと〉は、「女性であること、女性として生きること」に安心感を抱けなくなる体験であるといえよう。そのことについてBさんは、逆説的ではあるものの、「今わたしがここにいることをだれも知らないということをすごく安全に感じる」と表現していた。

こうしたBさんの語りにおいて特筆すべきことは、さまざまな人生経験を経た支援者の「わたし」でさえも、被害者の「わたし」が抱いた、社会に存在することへの漠とした不安をぬぐいきれずにいるということである。筆者がこの点をことさらに取り上げるのは、性暴力の悲惨さを強調したいからではない。そうではなく、たとえBさんのように20年以上、性暴力の問題に携わってきた支援者であっても、自身の性暴力被害による影響を何事もなかったかのように白紙に戻せるわけではなく、その経験とともに生きているという事実があることを確認するためである。つまるところ、Aさんのように「もうひとつの物語」を描いて、物語の意味づけを変えることによって「回復」につながることもあれば、Bさんのようにその経験の意味づけは変わらないけれども、その経験から得られた感覚を保ちつつ生きることもまた再被害を防ぐひとつの戦略であるとも考えられる。

## 4-2. 「身体的人格の統合性 (integrity)」への侵害

### (1) Cさん、男性、30歳代、活動家

次にCさんの語りを紹介する。Cさんは男性である。小学6年のときにひとりで訪れた近所の銭湯で二人の成人男性から性器を触られ射精させられるという被害や、中学生のときに見知らぬ成人女性から無理やり性交さ

れるなどの被害を受けていた。被害経験について、「男が声をかけてきたり、(女性に)勝手に乗ってこられたり、(常識の範囲内の性暴力と)真逆をされてる自分がいて、わけがわからなくて」と語った。また、家には祖父母と母がいたが、「性を語るなっていう」家庭で育ったので、被害を受けたことを誰にも開示できず、ひとりで抱え込んだという。

そして現在は、どこへ行くにも複数のぬいぐるみを持参し、「もうひとりの自分に語りかけ」ることで「支えてくれてたかどうかはわからないけど、ある一定、精神的に楽」になるという心の状態を語ってくれた。

そういう性暴力とか、性被害にあった子っていうのは、小さいときに  
あったら、人形と会話したがるって何か論文系に書いてあって。さすが  
にちょっと愕然としたことがあって。確かに、あの人形とか好きなんです  
すよ。かわいいものっていうか、が。で、好きで、なんだけど。自分で  
自分を落ち着かせようとしたりとか、そういう感じで。まあ自分のなか  
で、その変な言い方かもしれないんだけど、「なにになにちゃん」みたいな  
感じで。対話をする形なんだけど。それぞれに個性を持ってるし、あ  
る一定の年齢設定もされてるというか。まあ、これもどうかと自分でも  
思うんですけど。でも小さい時からそれはあって、やっぱり、その設定  
が見事に描かれていて。自分の現状が。うーん、何ていうのかな。「捨  
てればいいのに」っていわれると、もう精神的にカーッとくるっていう  
か。何かサポートしてくれる子たちなんだっていうような認識が自分の  
なかである。(中略)ショックでしたね。自分っていうのは、性暴力的な、  
性被害的なものが大きく起因しているって、そういうふうに(論文の中  
に)書かれてて、やっぱりそういうことが引き金でそれに対話をするこ  
とによって自分を納得させようとしてたりとか、癒そうというふうにし  
てたのかなあって。見事にこの論文がドンピシャだとか思って。

Cさんの場合、被害者の「わたし」にとって、マイクロ・トポスに位置していたのは、「性を語るな」という価値観を抱いていた祖父母や母であった。言わずもがなAさん、Bさんと同様、祖父母や母の価値観には、マクロ・

トポス、メゾ・トポスに位置している「性について語らない、語れない」という日本社会の状況が反映されている。また、「性行為に対して能動的なのは男性、受動的なのは女性」「性暴力の加害者は男性、被害者は女性」といった性規範もマクロ・トポス、メゾ・トポスに該当するだろう。そうした価値観を内面化していたがゆえに、Cさんは被害経験を誰にも相談することができず、辛い気持ちをずっとひとりで抱え込んでしまったと言えよう。

一方で、支援者の「わたし」の<sup>トポス</sup>場所からは、ぬいぐるみを媒介としたストーリーが語られていた。支援者の「わたし」にとってミクロ・トポスに位置していたのは、子どもの頃から対話を重ねてきた複数のぬいぐるみであり、メゾ・トポスにあたるのが「性暴力被害による影響とぬいぐるみとの対話に言及した論文」であったといえる。それというのも、Cさんは当初深く考えることなしに、ぬいぐるみにそれぞれのキャラクターを設定し、日常的に対話を繰り返してきた。しかし論文を読んで初めて、かつて「わたし」が受けた性暴力は自我がバラバラにされるような体験であり、ぬいぐるみとの対話をとおして「わたしが何者であるのか」を確認できたのだと考えられる。

Cさんの語りからは、国連による性暴力の定義にも示されているように、性暴力がまさに「身体的人格的統合性（integrity）への侵害」であり、そうしてバラバラにされた「わたし」の感覚を取り戻すにあたり、カウンセリングなどで、直接人と対話することのみならず、擬人化された「ぬいぐるみ」などとの対話も新しいアイデンティティを形成するための実践として有効であることが確認できた。

## (2) Dさん、女性、30歳代、活動家

次に紹介するのは、Dさんの語りである。Dさんは、中学2年のとき、下校途中に警察官を装った見知らぬ男性から声をかけられ、人目に付きにくい場所で性器を触られた。「頭では何されたかとかわかった」けれども「現実感覚がなくなって」、その日の夜「お風呂に入ったときに、完全に自分の意識と身体が切断されてる」ような、解離した感覚に襲われたそ

うだ。Dさんは自分が被害を受けたことを「逃げんかった自分が悪い」と受け止めており、また「父から母へのDVがあった」ので、父親にこのことが伝わると「母親がどれぐらい責められるか」という思いが浮かび、誰にも話せなかったという。その後、「朝も起きられなくなり」、「学校に行つて帰るまでの道が怖く」なり、「学校を極端に休むようになった」。しかし当時は、「自分がしんどいのんと、出来事との繋がりは全然なかった」そうだ。高校に入って環境が変わり、ようやく「変わるチャンスを自分なりに」見つけて、「楽しいキャラ」になり、回復のきっかけをつかんだという。しかし、「高校のときの自分、大学の時の自分っていうのは全然別の人」という感じで、「わたし」というまとまりのある統一感がもてなかったという。Dさんにとって、「回復のなかで一番大きいもの」として、「ラジオ番組との出会い」について語ってくれた。

高校1年のときにね、ラジオとの出会いがあって、それからですよ、すごい元気になっていった感じがするのは。(中略) ラジオ番組に自分の葉書を出したときに名前が読まれて、自分がとった行動が、誰かが、誰かというかラジオ局の人が受け止めてくれて、自分の希望を叶えてくれて、で、それが要はわたしとラジオ局とのやりとりではなくて、ラジオ局が近畿一円で放送されて、もちろんわたし以外のリスナーの人のリクエストが流れてくるわけで。(中略) さっきその、統一感がなくてバラバラな感じっていうのをいったんですけど。それも何ていうのかな、葉書を書いた自分、ポストに入れた自分、で、ラジオから名前呼ばれてる自分っていうのが一緒なんやっていうのが。ほんまに根本的なところがバラバラしそうな時も、自分の行動と結果と、きっちり名前を呼んでくれる人がいて、全部自分なんやっていうのは、ほんまにそれをもしかして確かめたくて毎週書いてたのかもしれない。何か自分の居場所というか、居場所じゃないなあ、自分が一体何者なのかとか、それがすごい統一されてたと思う。

またDさんは、ラジオ番組を「生き延びる手段でもあった」と位置づけ

ていたのと同じく、性暴力被害を受けた当事者としてインタビュー調査やメディアからの取材に協力し、自らの被害経験を語ることも「エンパワメントにつながっている」という。

やっぱり自分の経験を自分だけのものにしないで、たくさんの人が、何かつながれたらいいと思う。わたしが直接誰かと会うんじゃなくても、いずれ記事になったときに、それをまた誰かが読んでくれるわけで。すごい輪が広がるって思うと、わくわくするし。(中略) その自分の被害を受けたときの、あのときの行動が、すごく勇気のないことやっというふうに位置づけてたから。誰にもいわんかったり。でも、それはある記者さんとしゃべってるときに、ああ違うわ、考えたら、あの出来事をひとりで抱えて、まあそれなりに、その経験に関しては、自分でずっと抱えてたってすごいやんかって思ったん。(中略) (性暴力の問題に取り組んでいる人たちに出会うことについて) 世の中捨てたもんじゃないっていう気分になれるっていうか、何か、ああこのことを真剣に考えている人たちがいるんやって思っただけで救われる。それですぐに自分のしんどさが消えるわけじゃないし、解決しないこともいっぱいあるかもしれないけど、ひとまず、自分の存在を認めてくれたって感じかなあ。何かもう、存在さえも否定されたような気になる加害者との出会いと正反對のことっていうか。

Dさんの場合も他の対象者とたがわず、被害者の「わたし」にとって、マイクロ・トポスには、近しい家族の存在、すなわちDV関係にある母と父が位置していた。Dさんの家族は、元々「何か困ったことがあったり、嫌なことがあったり」しても「いわないし、共感しない」家族だったようだ。「逆に母親が何かいったら、父親がそれをおもいきり否定したり、認めない」ということを見てきたので、「自分が困ったときに助けを求めるっていうのは学んでなかった」という。こうした家族背景にある被害者の「わたし」の場所からは、<sup>トポス</sup>〈性暴力被害にあうこと〉は、親から「怒られる」ようなできごとであり、被害にあったことを「自分さえ蓋しといたら」、「わたし

がいわんかったら、このできごとは消えるんや」と受け止めることにつながったようだ。そして、そうしたDさんの家族が生活しているメゾ・トポスとしての地域社会について、Dさんは次のように語っている。「すごく昔からの地域だから、どこの誰っていうのがみんなわかってて、10km離れた所の人でもわたしのこと知っていたり」するような地域で、「これで(性暴力のことで)警察に通報とかなって、なんか事件になって」ということを想像すると、たやすく通報もできなかったという。

つまり、Dさんが被害にあったことを誰にも相談できなかった背景には、本来、人権を侵害された側のDさんや母親が、加害者や社会に対して暴力的な行為の不当性を訴えたり、必要な支援を要求することが妥当な状況であるにもかかわらず、むしろ加害者によって社会的に孤立させられ、DVであれ、性暴力であれ「被害にあう方が恥かしい、被害にあう方が悪い」と思いこまされている背景があることが見いだせた。

一方で、支援者の「わたし」の<sup>トポス</sup>場所からは、ラジオ番組を媒介としたストーリーが語られていた。支援者の「わたし」にとってマイクロ・トポスに位置していたのは、ラジオ番組であり、メゾ・トポスにはラジオを聴取しているリスナーたちが位置していた。Dさんは、葉書でラジオ番組のリクエストを投稿して、ラジオの電波を通じてDJから自分の名前が呼ばれるといった一連の相互行為を通じて、Dさん自身に統一感が生まれたという。ラジオ番組のリスナーとして期待されている役割、つまり、葉書にリクエストを書いて、ポストに投函し、ラジオを聴取するといった行為を遂行することによって、ラジオの向こうにいるDJや、他のリスナーたちとつながることができ、そうした他者とのコミュニケーションをとおして自我の統一が図られたと考えられる。Dさんは、こうした体験をとおして〈性暴力被害にあうこと〉を、まさに自我がバラバラにされる体験だったと意味づけ直しているといえよう。Dさんの事例で興味深い点は、人の自我が形成される際に対峙する他者として、家族などの身近な存在のみならず、ラジオ番組の向こう側にいる電波でつながったその他大勢の他者も機能するという点である。

そして、Dさんにとって、〈性暴力被害にあうこと〉の意味づけを変容

させるにあたり、研究やメディアの取材に協力することもまた重要な要因となっているようだ。かつて「わたし」の被害経験は、秘匿すべきことであり、自身がとった対処行動を「勇気のないことだ」と認識してきた。ところが、支援者の「わたし」が支援者や研究者、マスコミの人たちに出会って自身の被害経験について情報提供することで、性暴力の問題を顕在化させることができ、かつて被害にあった自分自身をも肯定的な存在として確認できるようになったという。Dさんの語りからは、性暴力の問題や被害者が抱えている課題を社会に向けて報告すること自体が、その問題を社会で解決しようとするメッセージとなり、当事者のエンパワメントにつながる可能性があることを見いだせた。

#### 4-3. 「加害者」「被害者」カテゴリの再構築・脱構築

##### (1) Eさん、女性、50歳代、活動家

次に紹介するのはEさんの語りである。Eさんは幼少期から成人期にいたるまで、親が経営している店の客からスカートをめくられたり、見知らぬ大人から道で突然首をしめられたり、映画館や電車のなかで痴漢にあうなど数多くの被害を受け続けてきた。その際、Eさんは加害者に対してその場で反撃したり、被害後に親や教師に伝えるなどの対応をしてきた。ところが、周りの大人たちの反応は「知らん顔して」みていたり、「一人で映画館行っちゃいけない」、「短いスカートははいてるからね」などと言われ、責められた気持ちになったという。

そして、数ある被害のなかでも「一番自分にとって最悪だ」ったのは、「小学校に入るか入らないか」のころ、近所の開業医のレントゲン室で医師からスカートをめくられ、性器を触られた経験である。そのため、「先生っていう権威をもつ人は苦手」で「怖い」ので、「今でも病院に行きたくない」と思っているという。けれども被害の後、Eさんが最も辛かったこととして語ってくれたのは、「権威」をもった人、あるいは「大人の男性」への恐怖心ではなく、自身の息子に対する複雑な想いであった。

わたしが一番被害体験で辛かったのは、今思い出すと……。あの、わ

たし息子がいるんですね。その息子が、やっぱり身体が成長して、男性の身体になっていく頃が、どう対応していいのかわからなくて、一番怖かったんです。夫は大人になった男性の身体として知り合ってますし、そのいくらわたしが大人の男性から被害を受けたとはいえ、自分から望んでこの人を好きになったんだけど、自分の産んだ子が、小さくてかわい、お人形さんみたいだった子が、突然こう大人になっていく。どうも自分と、こう、納得することができなくて、ちょっとだから、思春期の頃、どう取り扱っていいかわからなかったですね。

Eさんは、妊娠中にお腹の子が「男の子だなんてわかったときに、ああ、どうしよう」と思ったという。「ペニスがついていることでオムツかえないといけないときにどうしたらいいんだろう、気持ち悪い」と思っていたそう。そして、息子の身体が二次性徴を迎えて変化していく時期に最も戸惑ったという。成長した息子の姿を加害男性と重ね合わせてしまい、「自分の子どもだってこともよくわかってるけども、ただ身体が怖いんです。そのものの物体が。あの巨大な恐ろしい男の生き物になって……」と感じていたという。ところが、今回、息子が結婚することになったとたん、加害男性ではなく「遠くにいるカップル」程度の認識に変わったそう。

(息子の二次性徴への)意味づけは、ただ気持ちが悪いという感覚だったと思うんです。どんどん身体が変化してって、自分の知らない男の人が突然ここにいるみたいな感覚のような気がするんです。(中略)最初からそれだったら、それはいいんです。それに慣れてきますから。でも、それが突然変化していくと、何か、いつこの人来たの?っていうか、加害者がここにまたいるのっていう感覚だった気がしますね。異性というより、やっぱり、男性、加害者の男性という形でみていたような気がするけども。だけど、おかしなことに、今回結婚することが決まったら、それがふっとなくなっちゃったんです。彼女ができて結婚するってなったとたんに「遠くにいるカップル」くらいな見方をしているような気がするんです。



Eさんは、性暴力にかんする活動を始めた後に、先述した近所の開業医からの性被害について一冊の本にまとめたそう。そして、両親にその本を持っていったら「こんなことはまともな奴のすることじゃない、頭が狂ったんか」「お前の言ってることがまともじゃないってことを親戚中に言ってる」といって怒られ、その後数年間両親と会うこともなかったという。こうした加害者擁護ともとれる両親の反応から鑑みるに、Eさんの場合も他の対象者と同様に、被害者の「わたし」にとってマイクロ・トポスには両親が位置していたと考えられる。また、被害のことを相談した際にEさんを責めたり、見て見ぬふりをした教師や周りの大人たちは、性暴力の加害者よりも被害者が責められたり、性暴力が蔓延する社会を容認するような姿勢をEさんに伝えたという意味において、マクロ・トポスに位置していたといえよう。

一方、支援者の「わたし」の<sup>トポス</sup>場所から語られたのは、息子を媒介としたストーリーである。支援者の「わたし」にとって、マイクロ・トポスに位置していたのは、息子であり、加害した男性たちであろう。通常、人びとが幼年期に経験する最初の社会化の過程において、「意味のある他者」として想定されているのは、親やきょうだい、そして学校の教師などである。ところが、Eさんの場合、度重なる性暴力の加害者たち、とりわけ開業医の医師が、「男性一般」に対する認知につながるような重要人物として機能した可能性が高い。実際Eさんは、この被害経験の語りの導入において「わたしにとっての原点にもつながるんですけど……」と述べており、Eさんにとって医師による行為が強烈的な体験となったことは間違いない。こうして、Eさんにとって危険人物として警戒しなければならない範囲が「男性一般」に汎化された帰結として、本来、愛すべき対象である息子をも「男性」という危険人物のカテゴリに包含してしまったと考えられる。さらに特筆すべきことは、現在、支援者の「わたし」は、危険人物としての「男性一般」に対する意味づけを大きく変容させてはいないものの、息子に結婚するパートナーができたことで、息子から性的対象としてみられる可能性と、そこから派生する恐怖心を減じることができたことは、大変興味深

いことである。つまり、息子自身は恐らく何も変わっていないであろうが、Eさん自身が「パートナーがいる男性は、そのパートナーと性的関係を育むものだ」といった価値観が根底にあるからこそ、安心感が得られたものと推察されるからだ。

## (2) Fさん、女性、40歳代、カウンセラー・活動家

最後に紹介するのは、Fさんの語りである。Fさんが通っていた中学校は「スラム状態の学校」であり、「暴走族が学校のなかを走り回って」いたそうだ。また、教師が「体育の授業で女の子を一列に並べて、前から順番に胸とお尻を触っていく」ような状況で、「不良っぽい子らもそれをまねるようになって。両方の相乗効果で、無茶苦茶なことになって」いたという。学校では「スカートはめくるし、羽交い絞めにされて体は触られるわ、押し倒されるわっていうのが、日常茶飯事」で「常に緊張しておかなければ、何されるかわからない」状態で、「女の子に対して制裁を加えるのは殴る、蹴るよりも性的な暴力を加える方が早い。(中略)だから、集団リンチのなかで、そこで集団強かんが起こってきていた。中学2年の段階で」といった環境で3年間を過ごしたそうだ。そのため、「やっぱり、基本的に人をあまり信頼できていない」という。

Fさんは、成人後にセクシュアリティの勉強をとおしてかつての中学時代の経験を振り返るとともに、性暴力被害を受けた子どもたちを支援するためのNPOを立ち上げて活動をしていた。ところが、「厳罰化の流れによって虐待だとか性暴力(加害者)って、刑務所に放り込もうと思ったら放り込めるようになった」けれども、「それが子どもの幸せにひとつもつながらない」という壁に突きあたったという。そこで、「大人が変わらなければ、加害者が変わらないと」何も変わらないという思いに至り、現在は刑務所での性犯罪加害者矯正の仕事に携わっている。Fさんは、性暴力の「加害者」、「被害者」というラベリングが、その人の人格をも規定してしまう現状に疑問を感じている。

ただまあ、行為として、こっちの方が被害を受けた人だったけど、こっ

ち側、加害をした人っていう、ただそれだけの違いで、あるとき、ある場面の、ある出来事だけにに関してだけじゃないですか。それもね、被害と加害と、ね。被害者でもそうじゃないですか。あるとき、ある場面の、ある出来事で被害者になっている。だけど、そのラベリングを外したっていいわけでしょう、と思う。そんなこと忘れてね。(中略)被害者の場合も加害者の場合も、割とその出来事が、もう全人格を占めちゃうよね。

そして、Fさんは、加害者との関係性について、「治療者と治療される人っていう感じじゃなくて」、「人と人との関係性のなかで」かかわっているそう。なぜなら、加害者が人から尊重される体験をとおして、「対等な関係を築く」という土台作りになると考えているからだ。

そのつながりが結局、人間関係の回復になっていくんでしょう。被害者もそうだけれども、同じなんです。それを離れたら、わたしは指導者だし、彼は受刑者という役割に帰っていくんだけど、限られた場面だけでは、対等な関係を築く。そこがわたしは最大の治療やと思っているから。その、人同士の一身の対等な関係を作っていくことこそが、その人の最大の治療をすると思うんで。そこが、被害者の人との今までのアプローチとも全く同じで、人として尊重されることね。尊厳を守ってもらうこと。それがエンパワメントだから。そうすると、あんまり抵抗もないし、人だから色々な面もあるし、ものすごい常識な面ももってるし、いい人が多いですよ。事件さえ起こしてなければ。

Fさんの場合は、「自分の家のなかでそんな暴力があったわけじゃなかったんで、元々はわりと無防備なタイプだった」という。そのため他の対象者と異なり、被害者の「わたし」にとって、マイクロ・トポスには近い家族ではなく、中学で出会ったセクハラ教師や、暴力的な男子生徒が位置していた。Fさんが中学時代を過ごした1970年末～80年代は、全国で校内暴力が社会問題となり、対教師暴力や生徒間暴力が頻発していた時代である。

つまり、メゾ・トポスには、そうした暴力が蔓延していた学校、教師、傍観していた生徒などが位置し、マクロ・トポスには、能力主義や競争社会によるストレス、核家族化に伴う家庭環境や対人関係スキルの変化などの社会環境が位置しており、校内暴力が蔓延することにつながったと考えられる。Fさんは思春期の頃の体験から、「強い対人不信がでた」り、「一人ひとりとの関係は平気なんだけど、集団っていうのに対しては今でも過剰反応するところが」あるという。

一方、支援者の「わたし」の場所からは、<sup>トポス</sup>刑務所で性暴力加害者の矯正プログラムに参与しているストーリーが語られていた。支援者の「わたし」にとって、ミクロ・トポスに位置していたのは、加害者である。Fさんは、矯正プログラムで加害者とかかわる際には、相手を人として尊重し、対等な関係性を築くよう心掛けていたという。Fさんにとって、「性暴力加害者」も人格をもった一人の人であり、ある時、ある関係性においてのみ加害者になったと措定している。こうした人間観は加害者のみならず、「性暴力被害者」へも通底しており、それぞれのアイデンティティを常に全面的に背負う必要がないと言明していた。実際に加害者支援に携わる一方で、インタビュー当時も、Fさん自身が職場においてセクハラ被害を受けており、「性暴力被害者」であることも語られていた。Fさんの語りからは、人は、常にさまざまなアイデンティティを抱えながら生きており、マイナス要素を孕んだカテゴリのみにとらわれないことの重要性が示唆された。

## 5. 結論

かつて「性暴力被害者」であり、現在は「支援者」でもある対象者たちは、自身の被害経験を語る際に、過去から〈いまここ〉に至るまでの時間軸の中で、さまざまな経験や「他者」との関係を有機的に結びつけて物語を紡いでいた。本稿では、「自己への物語論的アプローチ」と「ライフストーリーの樹モデル」を援用して物語を分析した。その結果、性暴力被害の経験の意味づけは、個々の価値観に基づいてなされているとみなされがちだが、実際にはその人を取り巻く「意味のある他者」や「重要な他者」が抱

いている価値観を内面化していたり、より広い文化的・社会的な文脈から影響を受けていることを確認した。その当事者にとってマイクロ・トポスにどのような人間関係が形成されているのか、そこでどのような価値観を内面化し、どのような物語を生きているのかに着目することで、〈性暴力被害にあうこと〉の物語を「もうひとつの物語」へ書き換えたり、その経験の意味を再構築していくことができるだろう。また、「性暴力被害者」たちが、その経験ゆえにその後の人生を生きづらいつ感じているならば、それはやはり社会的・文化的・歴史的に構築された〈性暴力被害にあうこと〉に対する意味づけを社会全体で変えていく必要があるともいえる。

最後に、人は過去に被害を受けてひとたび「性暴力被害者」になったからといって、いつまでもそのラベルを自分に貼り続ける必要はない。実際に過去に起きたできごとの事実を変えることはできないが、「他者」を媒介とした語りをとおして、自身が生きてきた物語のストーリーに気づき、物語を再構築したり、意味を転覆させていくことは可能である。実際に、本稿で紹介した対象者たちは〈いまここ〉の自己のみならず、複数の時点での語りをとおして、「性暴力被害者」としての多声的なアイデンティティを提示していた。そうした語りの実践によって、自己イメージやアイデンティティを脱構築したり、再構築していく可能性があることが見いだされた。今後も研究などをとおして多声的な「性暴力被害者」アイデンティティのあり方を、社会のなかで共有することができれば、「性暴力被害者」に付与されたスティグマをそぎ落としたり、被害にあって生きづらさを抱えて生きている人たちの「もうひとつの物語」の創出に役立てられると考える。

## 文献

- 浅野智彦, 2001, 『自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ』 勁草書房。
- Bronfenbrenner, U., 1981, *The Ecology of Human Development: Experiments by Nature and Design*, Cambridge, MA: Harvard University Press. (=1996, 磯貝芳郎, 福富護訳『人間発達の生態学——発達心理学への挑戦』川島書店)
- 船津衛, 2011, 『自分とは何か——「自我の社会学」入門』 恒星社厚生閣。
- 井上俊・船津衛編, 2005, 『自己と他者の社会学』 有斐閣アルマ。
- 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編, 2002, 『岩波

- 『女性学事典』岩波書店。
- 伊藤良子, 2013, 「ミニコミにおける性暴力の社会問題化」女性学年報 (34), 67-87.
- 伊藤良子, 2015, 「〈性暴力被害にあうこと〉をめぐるパフォーマンスな語りの可能性」女性学研究 (22), 55-73.
- 岡本かおり, 齋藤梓, 大竹裕子, 2020, 「性暴力被害者の警察届出をめぐる被害当事者の思い——被害当事者へのインタビュー調査に基づく検討——」清泉女学院大学人間学部研究紀要 (17), 25-49.
- 齋藤梓, 岡本かおり, 2018, 「性犯罪・性暴力被害者支援の特徴——支援者のインタビュー調査から」目白大学心理学研究 (14), 31-43.
- 性暴力禁止法をつくろうネットワーク, 2014, 『性暴力をなくそう——包括的な性暴力禁止法にむけて』性暴力禁止法をつくろうネットワーク.
- White, M. and Epston, D., 1990, *Narrative Means to Therapeutic Ends*, New York: W. W. Norton. (=2017, 小森康永訳『物語としての家族[新訳版]』金剛出版)
- やまだようこ, 2020, 『質的モデル生成法——質的研究の理論と方法』新曜社.
- 柳原良江, 2001, 「男性中心主義と性行為における女性のセクシュアリティ」生命倫理11 (1), 48-55.
- 横山麻衣, 2013, 「性暴力サバイバーの語りの比較——質的比較分析法『MDSO-MSDOアプローチの可能性』——」書評ソシオロギス9(1), 1-17.